

学生の図書館利用傾向とシラバスから見る関係

西浦ミナ子*, 逸村 裕**

Relationship between characteristics of students' library usage and the course syllabi

Minako NISHIURA and Hiroshi ITSUMURA

抄録

大学図書館は、大学教育に貢献することが期待されている。そのためには図書館が提供する学習・研究支援を含むサービスが、教育の質の向上・改善に役立ち、目的意識や学習意欲の高い学生を育てることに寄与していく必要がある。しかし、現状では大学図書館と大学カリキュラムや教員との繋がりが十分ではなく、効果的な対策が行われているとは言い難い。この対策を検討するため、本研究では、学生の属する学問領域が学生の学習、調査・研究行動に何らかの影響を与えるという仮説のもと、2011年度にA大学図書館で実施した質問紙調査とインタビュー調査を通して、学問領域別に特徴の分析を試みた。また、授業内容が記載されたA大学のシラバスを学問領域別に分析することで、授業と学生の図書館利用との関わりを調査した。その結果、A大学図書館では学生の身分（学部生、大学院生）や学問領域により図書館に求める役割が一律ではないことや、授業と図書館利用との間には関係性があることを明らかにした。このように身分別、学問領域別に、利用者の特徴や共通点、授業の傾向などを把握することにより、A大学図書館がこれまで以上に大学教育に貢献する可能性が示された。

Abstract

University libraries are expected to contribute to university education. Accordingly, it is indispensable that the library services should improve the quality of the education and encourage the students to have a strong sense of purpose and high motivation of learning. However, considering the present condition in Japan where the ties between university libraries and university curriculum are weak, it is hard to say that effective measures have been implemented on this mission. To explore some potential measures, this study attempts to analyze user characteristics in divergent academic fields with a hypothesis that the affiliated disciplines may give some influence on students' learning and research behaviors. Questionnaire and interview surveys were conducted at A University Library in 2011. Furthermore, the course syllabi published by A University in 2011 were analyzed in order to identify the relationship between the courses and students' library usage. The results have revealed that the roles of the library vary depending on the disciplines and status (undergraduates or graduates) and that there is some relationship between students' library usage and the courses. These findings indicate that A University Library will be able to better contribute to the university education by grasping the characteristics of the user behaviors and the curriculum with more observations on disciplinary and status elements.

- * 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程
Doctoral program
Graduate School of Library, Information and Media Studies
University of Tsukuba
- ** 筑波大学図書館情報メディア系
Faculty of Library, Information and Media Science
University of Tsukuba

1. 序論

1.1 研究背景

近年、日本における大学の教育・研究機能に対する社会的要請が急速に高まり¹、その流れの中で学術情報基盤としての大学図書館の果たす機能や役割を見直す動きが活発になっている。特に教育機能に関する関心の高まりは顕著である。学術情報基盤作業部会による『学術情報基盤の今後の在り方について(報告)』(2006)²では、学術情報基盤が「学術研究全般を支えるコンピュータ、ネットワーク、学術図書資料等」とされていたのに対し、4年後の同作業部会による『大学図書館の整備について(審議のまとめ): 変革する大学にあって求められる大学図書館像』(2010)¹においては、「教育研究活動全般を支えるコンピュータ、ネットワーク及びデジタルな形態を含む学術図書資料等」へと表現が変わり、「教育」の文字が追加されている。大学の教育内容に関する具体的な変化として、『学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ)』(2008)³では、大学が受け入れる学生の「目的意識の希薄化、学習意欲の低下等、学生の多様化」に伴い、「学生に目的意識を持たせ、学習意欲を喚起する」必要性が生じていることが指摘されている。さらに「学士力」の参考指針の一つとして「これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力」が示されている(以下、「自らが立てた新たな課題を解決する能力」とする)点に関して、大学図書館は「学生が自ら行う調査、学習のための基礎資料の整備を含む学習環境を充実」¹させることにより、大学教育に貢献することが期待されている。

大学図書館が大学教育に貢献する必要があることについて、従来考えられてこなかったわけではない。『大学図書館施設計画要項』(1966)⁴においては、「大学図書館は大学における教育研究の中核的存在であることにかんがみ、その施設の近代化と整備拡充が計られなければ、大学の教育研究の使命を達成することは不可能である」と指摘され、4つに分類された大学の機能の一つに「学習図書館」が含まれた。実際、米国の Undergraduate library を意識した「学習図書館」がいくつか建設された。しかし、小島(1992)⁵によると、日本において「学習図書館としての機能を全面に打ち出している図書館」は少なく、その理由の一つとして「学生の学習条件に図書館が組み込まれていない、あるいは、重視されていない」ことが挙げられている。慶應義塾大学日吉図書館のような一部の成功例はあるものの、その後も「図書館が大学教育と完全に連携した機能、すなわち

学習図書館機能をどのようにすれば充足させることができるのか」(近藤,2003)⁶という問題が日本の大学図書館から解消されることはなかった。

21世紀に入ると、多くの大学図書館で、従来のサービスを見直し、情報リテラシー教育や「ラーニング・コモンズ、図書館職員等によるレファレンスサービスや学習支援」¹などに取り組む動きが見られるようになった。この動きは一定の評価を得ており、「文部科学省においては、大学図書館が一層の機能強化に向けてアクションを起こされる際の参考」として、『大学図書館における先進的な取り組みの実践例』(2011)⁷の「I. 学習支援」で8大学図書館の先進的な取り組みが紹介されている。しかし、様々な理由によりこういったサービスの効果的実現に至らない大学も多くある。「場」は用意出来たとしても、その中で提供するソフト面の人的サービスや大学教育との連携が不十分なため、個々の学生の学習能力向上に繋げることはなかなか難しく、その結果、ラーニング・コモンズに対する「箱物批判」が生まれる。永田は「とくにわが国の場合、箱物として「インフォメーション・コモンズ」を議論する傾向が強く、物理的コモンズだけが注目されがちである。学習用のコンテンツ(この議論もきわめて少ない)が得られないインフォメーション・コモンズは、ほぼ「自習室」と等しく、単なる作業場所でしかない」と述べている⁸。また、竹内(2010)⁹も「“日本型”ラーニング・コモンズは…単なる空間の提供であるケースが目立つ」としている。

しかし、一部の大学では、そこからの脱却を図るべく取り組みが始まっている。大学図書館と大学教育の連携を強化させる取り組みとして画期的と言える例が千葉大学の「アカデミック・リンク」である。『大学図書館における先進的な取り組みの実践例』(2011)⁷の「II. 教育活動への直接的関与」の中でも取り上げられ「授業資料ナビゲータ」という千葉大学附属図書館のパスファインダーの「構築・提供はアカデミック・リンクにおけるコンテンツ提供のための中核的機能の一つと位置付けられ」ていることが紹介されている。しかし、千葉大学以外に「II. 教育活動への直接的関与」の項で紹介された大学図書館は3例しかなく、日本の大学図書館が教育活動に直接的に関与する目立った事例は少ない。

「学生が自ら行う調査、学習のための基礎資料の整備を含む学習環境を充実」¹させることによって、大学図書館が大学教育に貢献することが期待され、それに応えようとする動きがあることは確かだが、その広がりはまだ限定的であると言える。

1.2 問題意識

大学図書館が大学教育に貢献するためには、提供する「学習環境」やその他の学習・研究支援を含むサービスが、大学教育の質の向上・改善に役立ち、目的意識や学習意欲が高く、また「自らが立てた新たな課題を解決する能力」を持つ学生を育てることに寄与していく必要がある。この能力は「学生が大学を卒業して以降も生涯にわたって自ら学習し、課題解決する」¹ことを指し、そのためには「電子情報資源、印刷物を含めて、適切な情報を得るために各種ツールを使いこなし、得られたデータや情報を分析・評価し、その成果を分かりやすく表現し、発信する能力を身に付けることが求められている」¹とされる。これは、以前から米国の高等教育において注目されている“critical thinking skills”に近い能力である。“critical thinking”は、「自分で物事を考え抜き、自分で問題を提起し、自分自身で関連する重要な情報を見つける、等々の能動的過程」¹⁰である。Whitmire (1998)¹¹によれば、米国では学生のこの能力の強化に大学における経験が影響を与えているという調査結果¹²が出ており、その大学での経験の中には、大学図書館の利用経験も含まれることが複数の調査で明らかにされている¹³⁻¹⁵。つまり、大学図書館が学生の critical thinking skills の獲得に貢献しているということである。学生の critical thinking の能力を伸ばす大学図書館の意識的取り組みとしては、図書館員と教員が協働し critical thinking の概念を推進する授業を開発した Ormondroyd (1995)¹⁶の例、教員と協働し学生の critical thinking のスキルを伸ばす授業のために文献利用指導のプレゼンを設計した Bodi (1992)¹⁷の例、学生の critical thinking を伸ばすために設計された情報源評価の基準を提案した Engeldinger (1988)¹⁸の例などを紹介している。教員との協働や授業との関わりは、重要な鍵と言えよう。

日本においても大学図書館と教員や授業との連携の必要性について認識されてはいるが、現在のサービス状況から考えると、その実施は不十分である。図書館が学生の「自らが立てた新たな課題を解決する能力」を培う役割を十分に果たしているとは言い難い。それは、大学教育との関係の希薄さ¹⁹の他に、「集団の中で平均化された最大公約数としての存在」²⁰として利用（学生）を見ていることに大きな要因がある。

1.3 本研究の目的

学生を「集団の中で平均化された最大公約数としての存在」²⁰として捉えるのではなく個人として対応することが理想的であるが、図書館側の人員・予算不足の続

く状況下において、個人へパーソナルサービスを提供することは困難である。そこで、「集団の中で平均化された最大公約数としての存在」よりは個人の特性に近くという意味で、学生の学習、調査・研究行動に影響を与える要因に注目したい。その要因として、大学のカリキュラム、教育方針の他、学生個人の学力、動機など様々考えられるが²¹、本研究では、学生の属する学問領域²²に焦点をあてる。また、大学図書館の授業への関わり方の重要性を重く受け止め、大学の各授業内容や成績評価基準について記載された公式文書であるシラバスを学問領域別に分析することで、大学図書館と授業との関わりを検討する。シラバスについては、中央教育審議会大学分科会大学教育部会 (2012)²³において「学士課程教育の質的転換への好循環のため」の方策の一つとして示されるように、文部科学省も力を入れるよう指示している。

シラバスを分析する手法は米国で“syllabus study”、“syllabus analysis”などと呼ばれている。初期の段階では、シラバスの代わりに“university catalog”（大学の講義内容一覧、科目一覧、大学要覧）が分析されていたが、シラバスに比べて記述内容が不十分であることから、シラバスが採用されるようになった（この変遷については2.2で述べる）。

本研究では以下のリサーチクエスチョンを設定した。

1. 大学生（学部生、大学院生）の図書館利用行動には、学生が属する学問領域により特徴が見られるか。
2. 大学のカリキュラム（授業）は学生の図書館利用に影響を与えているか。学問領域により、その影響に相違点・共通点は見られるのか。
3. 「自らが立てた新たな課題を解決する能力」を持つ学生を大学教育の中で育てるために、各学問領域の特徴に合わせた図書館の学習・研究支援サービスを展開することは有効か。

これら3つのリサーチクエスチョンを検討することで、大学図書館が学問領域別に利用者サービスを開発することの意義、大学図書館と大学授業との連携強化が大学教育に及ぼす教育的効果、大学図書館が学問領域別に大学授業を支援することの有効性を明らかにすることを本研究の目的とする。

2. 先行研究および関連文献

2.1 大学図書館の利用者研究に関する文献

本研究の調査を行うにあたり、大学図書館の利用者研究に関する文献をレビューし、利用者研究の意義や現

状を確認する。

学問領域別に存在する情報利用・情報探索行動の相違については、これまで様々な研究がなされてきた。

“Bibliography of Use Studies” (1964)²⁴の書誌・抄録を見ると、自然科学や工学分野の研究者や専門家を対象とした調査が1920年代後半からすでに米国では行われていたことが伺える。研究者や大学院生を対象とした調査が主流であったが、徐々に学部生を対象とした調査も行われるようになった。学部生の場合は、学部教育と大学図書館がどう関わるか、また大学図書館が学生の能力向上にいかに関与するか、という観点での研究が目立つ。米国では1970年代に教育改革の一つとして“Writing Across the Curriculum (WAC)”運動が活発になり、文章を書くことが、学生の学びやcritical thinkingスキルの向上に繋がるという考え方が広まっていく。Mellon (1986)²⁶はこのWACから取り入れた授業法を用い、「学生が大学図書館で初めて調査を行う時に持つ気持ち」についてのデータを収集し、グラウンデッド・セオリーの手法で調査した。その結果、学生の75%~85%が初めての図書館利用において「図書館不安」を抱くことが明らかになった。「図書館不安」とは、図書館において調査活動を行う際に抱く不安感であり、大学図書館の規模の大きさの他、自身の図書館利用スキルが十分でないことを恥ずかしいと感じ、図書館員に質問をすることはスキルの無さを露呈することに繋がる、などの心理的要因に基づくとされる。Mellonはこの結果を受け、レファレンス担当の図書館員と学生との直接の触れ合いを最大限考慮した図書館講習会“warmth seminars”を設計した。図書館不安の存在を「よくある当然のこと」として学生に伝え、不安の軽減を図ったものである。Mellonの調査では対象者の学生を学問領域ごとに分類しなかったため学問領域別の傾向は不明であるが、大学図書館における利用者研究の流れを見る上で重要な研究と言える。

MacAdam (1995)²⁵は、Mellonなどの先行研究を挙げ、1980年代半ば頃から高等教育現場では学部生のための“critical thinking”を育てるカリキュラムに力点が置かれ、大学図書館でも文献利用指導などが生む理想的な結果として意識されるようになったことを指摘している。この流れの延長線上でWhitmire (2001)²⁷は、学部生を対象として、人口統計学的特性（ジェンダー、人種、年齢など）、学力、図書館講習会の受講経験など様々な要因の中から、何が学部生の図書館利用に影響を与えているかを調査した。その結果、学部生の図書館利用とcritical thinkingの評価スコアに相関があることその他、学生の専攻分野が図書館利用に影響を与えているこ

となどを明らかにした。専攻分野については、大学2年次と3年次の間に人文科学分野に在籍することと、1年次から3年次まで通して社会科学分野に在籍することは図書館利用に影響を与えるが、自然科学、数学などに在籍することは図書館利用に影響を及ぼさない、とされた。

さらにWhitmire (2002)²⁸は、「学術分野間に存在する相違点は、図書館情報学において常に調査の関心事であった」と1980年~90年代の調査をレビューし、その上でBiglan (1973)^{29,30}の学問領域分類モデルを用い、学部生の情報探索行動の違いが学術分野の違いに基づくものか検証を行った。結果、「soft」「pure」「life」領域に属する学部生の方が、「hard」「applied」「nonlife」領域の学部生よりも情報探索活動をよく行い、中でも「pure」と「hard」に最も大きな相違が見られることが明らかになった。このことから、情報探索行動における特徴的な分野間の相違を見落とすことは、あるグループにとっては都合が良いが他のグループに不利益を生じさせる結果に繋がる可能性があるため、大学図書館サービスの「one-size-fits-all（大は小を兼ねる）」提供モデルは賢明ではないことを指摘している。

一方、日本においても米国の後を追うように、学問領域別の情報利用・探索行動に関する研究は行われてきた。しかし、調査の数が少なく、学生よりも研究者を対象としたものが圧倒的に多い。

大学生を対象とした数少ない調査の一つとしては、片瀬 (2006)³¹が挙げられる。東北学院大学において「大学生の図書館利用行動が、大学における専門教育の成績に関連しているのか」を検討するため「2004年度卒業生（2,776名）の3、4年次の成績と図書館利用件数」を分析したものである。学科別の図書館利用においては、「もっともアクティブな図書館利用者が多い」のが「史学・キリスト教学科（74.1%）、人間科学科（64.3%）、言語文化学科（63.2%）」である一方で、工学部でも「電気情報工学科（59.7%）や物理情報工学科（30.7%）、機械創成工学科（29.1%）」には「ヘビーユーザーが多く、いずれも文科系学部（英文学科や経済学科、法学科）を上回っている」ことなどを示した。結論では「大学における教育に学生による図書館利用を有機的に統合していくことが重要である」と指摘している。

大学図書館が大学教育にどのように貢献していけるか、というアウトカム評価の観点で取り組まれた研究としては、戸田 (2008)³²が挙げられる。戸田は、「学生の大学図書館利用が大学における学習成果獲得に貢献していることを把握し示すこと」を目的とし、質問紙調査と

フォーカス・グループインタビューにより調査を行った。その結果、「図書館利用で得た「資料や情報を探す知識」と「必要な情報を探し利用する力」という学習成果との関連、「知りたいと思っていた情報や知識」と「専攻分野の専門知識」という学習成果との関連など」を示し、「図書館利用の結果が図書館の上位システムである大学教育システムの使命・目的に結びついていること、大学教育システムに貢献していること」を明らかにした。

以上のように、米国における利用者研究では、大学図書館が学生の *critical thinking* スキルの向上に貢献する可能性や、情報探索行動における特徴的な分野間の相違点に注目することの重要性が具体的に明らかにされる一方で、日本においては、大学図書館と大学教育との関係強化の必要性が指摘されているものの、まだ調査数は少なく、発達段階にあると言える。本研究は、先達としての米国の利用者研究を参考にしながら、日本の利用者研究の延長線上に自らを置き、日本における大学図書館と大学教育との関係性を学問領域別に検討したい。

2.2 Syllabus study に関する文献

大学図書館に関する *syllabus study* の先行研究は、米国では、1960年代から文献が見られる。

McGrath ら (1969)³³は、米国における *syllabus study* の先駆けとして頻繁に引用される。厳密には、分析したのはシラバスではなく *university catalog* であるが、大学の授業と大学図書館業務との繋がりを、カリキュラム関連資料から調査した初期の研究として重要視されている。McGrath らは、「現在の学部に関心を正確に反映し、比較的安定感があり、かなり高い継続性を持つ記録」として *university catalog* を選んだと述べている。結果として、分析にあたった大学図書館の目録担当者が「大学の教育課程についてはるかに理解が深まった」と述べるなど、大学図書館が授業との連携を図るための一定の成果を見せた。分析過程における主な問題点としては、科目内容の記述不足やそれに伴う解釈の難しさ、などが挙げられた。

Golden (1974)³⁴は、カリキュラム情報を集めるため *university catalog* を利用し、科目分類には LC 分類を適用した。McGrath ら (1969)³³の手法を参考にしたが、「考え方と手順に十分な相違点」が見られる。結果として、「図書館員は、調査が進むにつれ、大学の教育課程やニーズのより詳細で包括的な全体像を把握し、資料を探し出す際に教員を理解し、援助することが以前よりも出来るように」なり、「教員との接触が増えたことは、収書プログラムにとって重要で有益なこと」だったと成

果を示した。

Rambler (1982)³⁵は、*university catalog* ではなくシラバスを分析対象とし、“*syllabus study*” という表現をタイトルに冠した初めての論文として扱われている。「親組織の学術的領域を分析しようとする努力（挑戦）は全ての大学図書館の健全な運営管理のための必要条件である」という前提に立ち、カリキュラムに組み込まれた図書館を対応力のある図書館 (*responsive library*) と定義づけた。「シラバス上で広く見られる指導方法は、図書館の（カリキュラムへの）融合と図書館資料の利用に影響があると考えられる」とされ、データ分析の中で出てきた他の変数についても報告している。調査の結果、最もよくシラバスに記載されていた指導方法は、指定教科書、リザーブリストや総目録などの情報源から選んで講読、コピー資料、私物から選んで講読、試験、講義、ディスカッション、レポートである。多くの教員が一つの授業で様々な方法を使っていた。63%が図書館利用なし (*no library use*)、3分の1強がかなり (*much*) もしくはいくらか (*some*) の図書館利用あり、8%が非常によく利用する (*much / heavy use*) ことが明らかになった。学部ごとには、*Human Development* 分野で使われていた教授法が最も図書館資料に依存していることや、*Liberal Arts* はクラスの半分以上が図書館を利用しない指導方法を取っていたことなど、各分野間の相違点も明らかにした。米国の大学では科目番号がその科目レベルを表わし、「多くの場合、1年次に学習する入門コースは100番代、入門コース履修後に受ける科目は200番代、さらに上級のレベルの科目は300番代、個別指導や演習、自主研究の科目は400番代の番号がつけられている」³⁶。その科目番号を利用し、科目レベル別に分析がなされた結果、上級レベルの学部生や大学院生の科目で図書館資料の利用が最も高かったことから、科目レベルの高い学生向けの講習会を企画する必要があると提案した。全体的に、図書館資料は未活用の状態にあり、図書館は親機関が提供する科目の軽く半分以下に対するサービスのために、人材を配置し、運営していることになると指摘した。

Sayles (1985)³⁷は、カリキュラム調査の先行文献^{33, 34, 38}の手法をレビューし、科目概要を知る情報源として *university catalog* は分析の手始めには良いが「非常に短く、やや表面的で、時に不正確である」こと、一方シラバスは「科目概要を学生のための学習概要へ論理的に展開したもので、情報の金鉱となり得る」ことを指摘した。著者はシラバスを実際に調査したわけではないが、文献調査を行った上で、*syllabus study* の手法を提

案し、それがどのように図書館サービス（蔵書構築、図書館情報ガイド、見越しレファレンス、講習会）の向上に役立つか、について紹介している。

Anderson (1988)³⁹は、所属の大学図書館に1978年から保存されてきた25,000ものシラバスを分析することで、蔵書構築において図書館員の役に立つシラバスの調査方法を模索した。その結果シラバスは、1) 図書館職員と教員との間のコミュニケーションを向上させる、2) より関連の深い資料が図書館の蔵書に追加される可能性を高くする、3) 図書館資料の利用を増加させる可能性があることを明らかにした。その後実施されたインタビュー調査でも、この3つの結果は支持された。

Lauer (1989)⁴⁰も、先行文献^{35, 37}の手法にならい、**syllabus study**を行った。対象として選ばれた2つの大学 (Houghton College, Aurora University) から1988年の秋学期のシラバスが収集され、各大学の図書館利用量と求められる図書館利用の洗練度 (0 から 4 の 5 段階) が分析された。結果によると、上級レベルの科目ではより多く、より洗練度の高い図書館利用が要求されるという Rambler (1982)³⁵を支持する傾向が見られた。全体的に社会科学の科目で最も利用率が高く、人文学の科目ではむらのある結果が見られた。自然科学や芸術、音楽は利用率が低い、スタジオや研究室で高度な作業が求められているからだと推察している。学部生の図書館利用が低いことや、機関が重きを置いている分野は図書館に多くを求める傾向にあることなどが示唆された。

McDonald ら (1990)⁴¹は、先行文献^{35, 37, 39}によるシラバス分析手法は、**university catalog** を利用するよりも有益であるが、著者らが考案した **MOC (Must, Ought, Could)** 手法はさらに有益であると主張した。調査過程は3段階に分かれ、各段階で教員が直接関わる。著者らは「**MOC** は、蔵書構築をその分野の全範囲と領域からではなく、利用者やそのニーズから始めることのできる実行可能な仕組みを提供する」もので、それ以前には見られなかった手法だとした。また、**MOC** は小規模な学部図書館での蔵書を対象としたものだが、手法の根底にある信念は様々な状況や形態で所有された蔵書に応用できているとしている。

Bean ら (1993)⁴²は、「**syllabus study** の結果は、あらゆる主題エリア、科目レベル、そして特定の科目において図書館資料が計画的に利用されるかどうか、具体的な見積もりを図書館管理者に提供する」という Rambler (1982)³⁵の説を支持した。Rambler の3つの尺度での評価は主観的すぎるという理由から、「図書館利用カテゴリー」のチェックリストに対して、各シラバスの文章を

分析・評価する」手法を用いた。「図書館利用」の10のカテゴリーのそれぞれに関して2年間分を精査したところ、「研究論文／レポート／調査課題」のカテゴリーが最もよく言及され (289回)、「AV 機器」 (186回) や「AV 資料」 (167回) の他、「口頭発表」 (118回) も頻出することが分かった。逆に頻度の少なかったのは「文献利用指導」 (42回)、「リザーブ資料」 (29回) などである。設定した目的は程度の差はあるものの全て達成されたことから、著者らは「**syllabus study** は非常に有益である」と明言している。

Williams ら (2004)⁴³は、「図書館を学生の経験に組み込む鍵は、授業内容から切り離せない一部になることである。授業内容が必然的に伴い最も詳細な裏付けとなるものはシラバスである」とした上で、「本稿では、図書館員がシラバスから学べることについて議論し、シラバスの入手やシラバス内容分析の手法を提示する」と述べている。先行文献を調査し、「図書館利用分析のためにオンライン上のシラバスを取り扱った図書館文献は見当たらない」ことから、**University of North Carolina at Wilmington** の2002年秋学期と2003年春学期シラバスの内、オンライン上で入手可能なシラバスから無作為抽出で3125の授業が評価された。分析には、Lauer ら (1989)⁴⁰を参考に図書館利用を評価する6つの尺度が用いられた。結果として、調査した授業の41%が必須の調査報告書、プロジェクト、レポート、スピーチで図書館を利用することや、最も図書館利用を必要とする分野には、コミュニケーション研究、哲学・宗教、教育、心理、経済などの授業があることが挙げられた。著者らは「オンラインシラバス調査により図書館利用法の全体像が明らかになった。現在利用されていないが今後利用される可能性のある事例も発見した」と述べ、結果を学生の教育経験の向上へ繋げる可能性、その実際の方法や実践例を示した。

Shirkey (2011)⁴⁴は、「**syllabus study** は、蔵書、図書館員、図書館全体にとって利益を生み出す利用者目線の手法である」との考えから **syllabus study** を用いた蔵書構築評価を行った。シラバスを使う利点の一つとして「授業を履修する以外では、シラバスが教室で起こっていることを知ることのできる最良の手段である」ことを挙げた。2009年に **Southeastern Regional University** の芸術、英語、外国語と文学、歴史、そして哲学分野の教員から収集したシラバス調査と、教員に対する質問紙調査を行った。調査の結果、教員は必須テキストや補助テキストの19%しかリザーブに置かず、61%のテキストがリザーブされていないことや、リザーブとして欲しい資料

を図書館が所蔵していない場合でも55%の教員しか図書館に購入希望を出さないことなどを明らかにした。このことは重要資料のニーズを満たしていないことを示唆するとし、教員がリザーブに置きたい資料のリクエストをしないなら、そのニーズを予測する方法をみつけることがリエゾンの責務だとした。syllabus study はそれを遂行する一つの方法だと述べている。

Smith ら (2012)⁴⁵は、インディアナ州の University of Notre Dame で実施された syllabus study について報告した。著者らは先行文献^{37,43}から syllabus study の有用性を支持し、講習会担当の図書館員グループがその実施を決めた。図書館講習の恩恵を受ける可能性があるにも関わらず現在このサービスを利用していない科目を特定することを目標とする他、図書館利用に関して5つの仮説を立てた。合計144のシラバスを収集した後、図書館利用の洗練度測定のため Lauer ら (1989)⁴⁰が提案し、Dewald (2003)⁴⁶によって修正された5段階尺度を用いて評価した。結果、1つ目の仮説を除く全ての仮説が支持された。例えば、「授業のレベル（1年次-100, 2年次-200など）が図書館での調査の必要性の度合いに影響を与える」という仮説は、「上級クラスほど図書館調査がより必要とされる」ことが示されたことで支持された。また、「授業の主題分野（人文学、社会科学など）が図書館での調査の必要性の度合いに影響を与える。さらに、科学技術のシラバスはその他の主題よりも図書館調査を必要としない」という仮説は、「芸術/建築と社会科学が最も図書館利用を必要とし、ビジネスや科学技術は図書館利用の必要性が最も低いこと」を分析データが示したことで支持された。syllabus study は、図書館サービス利用の機会を発見する手法として有用であると結論づけている。

このように米国では、1960年代からカリキュラム関連資料として university catalog やシラバスを用いた調査が行われ、時代と共に発展してきた。シラバス上に表れる指導方法や成績評価法は図書館利用に影響があること、学問領域間で図書館利用を要する指導法の有無や程度に差があること、科目レベルが高いほど高度な図書館利用が求められること、など科目と図書館利用との関係が明らかにされてきた。また syllabus study が図書館-教員協働の潤滑油的役割を果たしてきた面も見られる。手法上の問題点も指摘されるが、上記先行研究ほとんど全てにおいて、この手法が大学図書館とカリキュラムとの連携によるサービス向上の助けになることが証明され、Finnell (2006)⁴⁷によると「syllabus study は、主体的な図書館サービスのために今なお人気がある手法であ

る」とされる。

一方、日本国内で上記のような大学図書館に関連した syllabus study が実施された例はあまり見られない。慶應義塾大学日吉図書館では「講義要綱や教科書一覧に沿って、毎年の学習用の基本図書をもれなく収集する」という考え方が反映された蔵書構築方針がある、と風間 (2008)⁴⁸が報告している。また、関連文献としては、長澤 (2002)⁴⁹、長澤 (2007)⁵⁰が挙げられる。

長澤 (2002)⁴⁹は、「1990年代に入って、日本の大学では、大規模な教育改革が進行している」状況の中、「教育改革に関する文献や報告書では、教員（図書館情報学専攻以外の教員）が大学図書館…の機能について言及することは極めて少ない」と指摘する。そのような状況を踏まえた上で、「大学における図書館の機能を教育支援の観点から検討するために、授業の構造を整理し、授業を構成している単位制度、シラバス、図書館がもつ機能を分析する。そして、授業との関係を中心に、図書館の機能を分析し、図書館の今後の課題について検討する」との目的が明示され、文献調査を行った。大学審議会答申などを調査、整理した結果、「図書館は、大学審議会答申や教員が指摘しているように、教室外学習を実質化させる重要な学習支援機関である」にも関わらず、「図書館など学習環境を整備する大学は少ない」ことが示された。シラバスについては、90答申、97答申、98答申において学習支援のためのシラバス充実化を求める記載の変遷がまとめられた。また「大学審議会答申が求めるシラバスの機能」と「教員が求めるシラバスの機能」の相違点が特定された。教員は「シラバスに示された文献を学生が効率よく利用するには、指定図書制度が有効である」と考えている。この点について長澤は、「学習に必要な文献をシラバスに提示する必要があると指摘される中で、必読文献を効率よく利用できるように、指定図書を設置するなど図書館における利用環境の整備が求められている」としながら、「実際には、シラバスに示されている文献は参考程度のもが多く、必ずしも授業法の改善と組み合わせた必読文献ではない。必読文献でない文献を指定図書にしても、学生の読みを動機づけるのは難しい」との問題点も指摘している。大学図書館については、大学審議会答申が求める機能と教員が求める機能に加え、図書館関係者が求める機能についても論じられている。大学審議会答申と教員の見解はほとんど変わらず「学習場所や資料を提供するという図書館本来の機能を強く求め」るものであり、図書館関係者の論点とは異なることが指摘された。長澤は「主として、教員は施設設備や資料というハード面の整備によって、図書館関

係者は人的援助等のソフト面の整備によって図書館の教育機能の強化が必要であるとしている」と分析している。今後の課題として、「教員には、学生がシラバスに示された文献を効率よく入手できるように、授業準備の段階で、文献の利用環境を整備しておくこと」、「図書館には、教員が図書館を視野に入れて授業を準備できるような支援体制を強化すること」がそれぞれ求められると述べられた。

長澤 (2007)⁵⁰は、インディアナ州の「アールム・カレッジ (Earlham College)」の図書館が実施する学習・教育支援の全体像を明らかにし、日本に紹介したものである。研究手法としては、「理論構築を目的としない記述的ケース・スタディの手法」を用いた。アールム図書館の学習支援は学位論文の調査対象になるほど定評があるにも関わらず、「特に、教育支援について、日本ではまとまった記述がみられないために、本稿の意義はその情報を提供することにある」としている。紹介される学習支援の中の「学科関連の情報利用指導」において、その準備過程でシラバスが当然のように利用されていることが手順の中に示されている。米国での *syllabus study* の先行文献で見られたように、まず図書館員から科目の担当教員にコンタクトを取り、支援が必要であれば教員が図書館員にシラバスを送付するところから始まる。その後、図書館員はシラバスを熟読し、テーマについて理解を深めた上でパスファインダーを作成し、学科関連指導の実施日には資料やデータベースの利用法なども説明する。教員は学科関連指導の日時等の情報をシラバスに追記するなど、一連の過程で図書館員と教員との強い連携が示されている。

長澤 (2002)⁴⁹と長澤 (2007)⁵⁰はアプローチは異なるが、どちらにおいても、日本では教員と図書館員の連携が上手く取れず、大学のカリキュラムと大学図書館との関係が希薄であることへの危惧が感じられる。大学図書館の教育支援サービス向上にシラバスに注目することの重要性が示されたことは意義深い。実際、日本においても *syllabus study* によって米国と同じような結果を得ることが出来るのだろうか。本研究では、「大学のカリキュラム（授業）は学生の図書館利用に影響を与えているか。学問領域により、その影響に相違点・共通点は見られるのか。」に焦点を当て、*syllabus study* を実施する。

3. 調査方法

1.3のリサーチクエスチョン1に対する調査方法としては、質問紙調査とインタビュー調査を採用する。本調

査方法は、質問紙調査（量的調査）とインタビュー調査（質的調査）を組み合わせることで相互補完的な分析を試みようとするものである。調査対象者は、A大学附属図書館利用者（訪問利用者、メールサービス利用者）の内、A大学の学部生、大学院生とする。リサーチクエスチョン2に対する調査方法としては、*syllabus study* を採用する。調査対象のシラバスは、質問紙調査とインタビュー調査の実施年度（2011年度）発行のものとする。

3.1 用語の定義

本研究で使用する以下4つの用語「学習」、「調査・研究」、「レファレンスサービス」、「シラバス」について、ここで定義する。

3.1.1 「学習」の定義

「学習」とは、「テキストや配布資料、教養書などで勉強し、必要な知識や技術を身につけること」を指す。例えば、試験勉強、語学学習などがそれにあたる。

3.1.2 「調査・研究」の定義

「調査・研究」とは、「テーマや課題を自ら設定し、それについて情報を集め、調べたり、実験やフィールドワークなどを行うことで、新たな知見を生み出すこと」を指す。例えば、卒業研究（卒業論文）、学術論文執筆などがそれにあたる。

3.1.3 「レファレンスサービス」の定義

「レファレンスサービス」とは、「図書館員が利用者の方から図書館や図書館資料の利用についての質問や相談を受け、学習や調査・研究のサポートをするサービス」を指す。A大学附属図書館では、図書館内のレファレンスカウンターだけでなく、図書館ウェブサイトの申込フォームからも提供されているサービスである。

3.1.4 「シラバス」の定義

文科省は、『平成7年度我が国の文教施策：新しい大学像を求めて－進む高等教育の改革－』（1995）⁵¹の中で、「シラバスとは一般に授業計画を指す」と明記し、「授業の質を高めるための方策の一つとして、教員にシラバスの作成を求め、また、それらを取りまとめ、冊子とする大学が増えてきている」ことに触れている。

一方、井下は『大学力を創る：FDハンドブック』（1999）⁵²において、「「シラバス」とは大学における「授業計画表」のことである」としながらも、「大学が個々のシラバスを束ねて分厚くし、それを「シラバス」と錯覚しているケースがある」と指摘する。これについては夏目ら (2010)⁵³も言及し、その理由として「日本の大学においてシラバスが普及した際に、アメリカの大学で使用されていた授業要覧とシラバスという目的や内容の

異なる2つのものが混同された」ことを挙げている。つまり、米国では、シラバスは「初回の授業で教員が受講者だけに配布する詳細な文書」を指し、「大学で開講されるすべての授業の内容を簡潔にまとめた冊子」である授業要覧とは異なるものだとの指摘である。

これを考慮してか、『学士課程教育の構築に向けて』(2008)³では、「授業科目」の前に「各」を付け「各授業科目の詳細な授業計画」と定義し、冊子でまとめられたものとの区別をつけようとする意図が伝わる。内容に関しても、「一般に、大学の授業名、担当教員名、講義目的、各回ごとの授業内容、成績評価方法・基準、準備学習等についての具体的な指示、教科書・参考文献、履修条件等が記されており、学生が各授業科目の準備学習等を進めるための基本となるもの。また、学生が講義の履修を決める際の資料になるとともに、教員相互の授業内容の調整、学生による授業評価等にも使われる」と詳細に示されている。

一方米国では、シラバスに言及される論文で頻繁に引用される Altman ら (1992)⁵⁴の中で、次のように記述されている。「語源上、シラバス (syllabus) には「ラベル」あるいは「目次」という意味がある。“American Heritage Dictionary”では、シラバスを「科目の概要」と定義している。シラバスが、科目の概要や主題の一覧、またそれ以上の情報を含むべきことは、誰もが認めるところである。しかしながら、シラバスの主要な目的は、その科目の内容、開講される理由、目標、合格点で修めるために学生に課される課題などについて受講学生に伝達することである。」つまり、シラバスの元々の意味は「ラベル」「目次」であり、辞書では「科目の概要」と定義されるが、単なる概要にとどまらず、各科目の受講学生に対して必要な情報を伝達する役割を担うものでなければならないことを示している。これは夏目らが指摘した授業要覧とシラバスの違いとも重なるところである。

Bers (1996)⁵⁵によると、シラバスは一つの授業に対し2種類あり、1つは“generic syllabus” (部局によって作成される包括的なシラバス) であり、もう一つは“class syllabus” または “instructor’s syllabus” (各教員が自分の授業のために作成するもの) と呼ばれるものである。上の日本語の定義に照らし合わせると、「大学で開講されるすべての授業の内容を簡潔にまとめた冊子」が “generic syllabus”、「初回の授業で教員が受講者だけに配布する詳細な文書」が “instructor’s syllabus” にあたる。

Parkes ら (2002)⁵⁶は、“syllabus” という単語の出現

時期について言及し、「目次」という意味合いで英語として初出したのは1656年のことで、「講義や科目の概要」の意味合いでの使用は1889年に始まったとしている。しかし言葉の意味についての不明瞭さはその後も長く続き、現在でも「どの大学教員も担当の各科目のシラバスを準備する必要性は理解していると思うが、「シラバス」が意味するところは、個人間で大きく異なるようだ」と述べている。この状況から Parkes ら (2002)⁵⁶は、200のシラバスを分析し、シラバスの機能を(1)契約、(2)恒久記録 (学習指導要録)、(3)学生の学びへの支援、の3つに分類し、シラバスの目的の明確化を試みた。

Doolittle ら (2007)⁵⁷も「シラバスとは何か、その役割、使い方の定義に関しては、あまり明らかにされていない」と述べており、シラバスの定義には今も様々な解釈が存在すると言える。

上記を踏まえた上で、本研究で扱う「シラバス」の条件は、以下の通りとする。

1. 日本におけるシラバスへの認識や作成法、普及状況、また収集する際の利便性などを考慮した上で、“instructor’s syllabus”ではなく、“generic syllabus” (部局によって作成される包括的なシラバス) とする。
2. 『学士課程教育の構築に向けて』(2008)³において挙げられている項目、特に「成績評価方法・基準」は必ず含まれているものとする
3. 形態は問わない (プリント1枚でも、冊子体でも、電子媒体でも可)。但し、複数の科目をまとめた冊子体はシラバス集、各科目に対する記述をシラバスと呼ぶ。

3.2 A大学の概要

調査フィールドはA大学である。A大学は総合大学であり、多くの学生が様々な学問領域について教育を受け、研究を行っている。調査実施年度の2011年度の学生数は、学部生10,155名、大学院生6,672名、併せて16,827名である。附属図書館の規模は大きく、教育・研究支援サービスに対して比較的高い意識を持つ。

本研究は、様々な学問領域における学生の図書館利用傾向を調査する必要がある、また大学図書館が提供する既存の教育・研究支援サービスを分析する必要があることから、A大学は調査フィールドとして適切であると考える。

3.2.1 学部、研究科の学問領域分け

A大学における学部・学科、研究科・専攻は、一般的な学問領域を反映するものではない。そこで、科学研

究費補助金の「系・分野・分科・細目表」⁵⁸を参考に、25の学部・学科と68の研究科・専攻を、「人文学」、「社会科学」「自然科学、工学、医学（以下 STM と呼ぶ）」、「総合領域（情報学、スポーツ科学、その他）」の4領域へ分類を試みた。本研究で学問領域と言う場合、この4領域を指す。

3.3 質問紙調査概要

A大学附属図書館をフィールドとし、2011年6月と9月に質問紙調査を実施した。調査票配布と同時にウェブ上での回答フォームも用意した。データの統合・比較を可能にするため、設問内容、構成は同一である。調査票は15の設問からなり、5つのセクションに分かれる。

- (1) フェイスシート（身分、所属、性別、年齢、国籍など）：設問1～5
- (2) 学習、調査・研究スタイル（場所、時間帯、相談相手など）：設問6～9
- (3) 図書館利用（来館頻度、目的、滞在時間など）：設問10～12
- (4) レファレンスサービス（認知度、利用経験、目的など）：設問13～14
- (5) 自由記述（希望するサービスなど）：設問15

有効回答数は第1回・第2回の質問紙を合わせると573件、ウェブでは142件、合計715件となる。この内、本研究の調査対象者は、学部生408名、大学院生213名である。学問領域別の学部生の内訳は、人文学106名、社会科学90名、STM158名、総合領域54名となる。大学院生は、人文学32名、社会科学68名、STM74名、総合領域35名である（専攻の記述が無く分類出来なかった4名は除く）。附属図書館は中央図書館の他に4館あるが、本研究では、中央図書館の正面口で調査票を配布したため、回答者の多くは中央図書館利用者となった。このことは、学問領域別に分析する際、考慮に入れるべき点である。

3.4 インタビュー調査概要

2011年10月17日（月）から11月8日（火）にかけて、学生18名に対し半構造化インタビューを個別に行った。対象者は、第1回と第2回の質問紙調査協力者の内、インタビュー調査に協力しても良いという意思表示のあった173名（第1回93名、第2回80名）の中から、学問領域や質問紙の回答内容などを考慮した上で選出した。内訳は表1の通りである。

3.5 Syllabus study 概要

先行研究^{35, 40, 55}の手法を基に、A大学から2011年度のgeneric syllabusを以下の手順で収集した。

1. 各学部・専攻のホームページで公開されていないか確認し、公開されていれば電子媒体で入手する。
2. 公開されていない場合は、図書館に所蔵がないか確認し、あれば該当箇所をコピーして入手する。
3. 図書館にも無い場合には、各学部・専攻の事務室に直接メールにて所蔵の有無を問い合わせる。あれば、紙媒体もしくは電子媒体での送付依頼、または直接訪問の上、閲覧・コピーの依頼をする。

最終的にシラバスの提供を受けることができたのは、学部では学科25件中21件、大学院では専攻70件中47件となった。それらを4つの学問領域に分類した結果、学部・学科では、人文学4件、社会科学2件、STM11件、総合領域4件となり、研究科・専攻では、人文学6件、社会科学8件、STM25件、総合領域8件となった。

収集したシラバスは、原則として平成23年度のものであるが、提供元の部局から「最低労力思想で設計されているため年度概念がない」との回答もあった。そのため、平成23年度版がない場合でも、「その後の内容にほとんど変更がない」ことが確認できた場合に限り、平成25年度のシラバスを採用した。

形態別に見ると、冊子体（コピー含む）のシラバス集は学科で5件、専攻で9件ある一方で、電子媒体で入

表1 インタビュー回答者の内訳

身分	通番	領域	学年	国籍
学部生	1	人文学	1年	日本
	2	人文学	4年	日本
	3	社会科学	2年	日本
	4	社会科学	2年	日本
	5	社会科学	2年	韓国
	6	STM	2年	日本
	7	STM	4年	日本
	8	総合領域	4年	日本
大学院生	9	人文学	前期1年	日本
	10	社会科学	前期2年	日本
	11	社会科学	後期4年	日本
	12	社会科学	一貫制5年	日本
	13	STM	前期2年	日本
	14	STM	前期2年	日本
	15	STM	前期2年	中国
	16	STM	後期2年	ベネズエラ
	17	総合領域	前期1年	日本
	18	総合領域	後期2年	日本

手できたのは、学科で15件、専攻で38件あった。どちらの形態でも入手できたのは学科、専攻ともに1件ずつであった。電子媒体でもシラバス毎のファイルは少なく、複数のシラバスを一つのファイルにまとめた電子シラバス集が多かった。部局によっては、シラバスと科目一覧や大学便覧が混同されている状況が窺えた。その場合は「成績評価方法・基準の項目を含む文書」と念押しし、再度依頼した。

このように、A大学では部局ごとにシラバスの定義や管理方法、認識が異なることが窺えた。3.1.4の「シラバスの定義」でも見た通り、その定義にはいまだ揺れがあると言える。

4. 調査結果

リサーチクエスト1に対する調査方法として採用した質問紙調査とインタビュー調査結果については、4.1にまとめて示す。それを受ける形で、リサーチクエスト2に対する調査方法として採用した syllabus study の結果を4.2に示す。

4.1 質問紙調査とインタビュー調査から得られた結果

4.1.1 学習、調査・研究場所としての図書館

質問紙調査では、学部生は学問領域を問わず学習場所としてA大学図書館を利用する割合が高いことが示された(図1)。調査・研究場所としての利用には、学問領域に差が表われ、人文学と社会科学では約98%の割合で利用されるが、総合では約72%、STMでは約59%と利用は低くなる(図2)。これは「図書館に足を運ぶ主な目的」を聞いた設問において「調査・研究のため」を選択した回答者の学問領域別内訳をみても、類似の傾向が確認できた。

インタビュー調査で8名の学部生に場所の使い分け

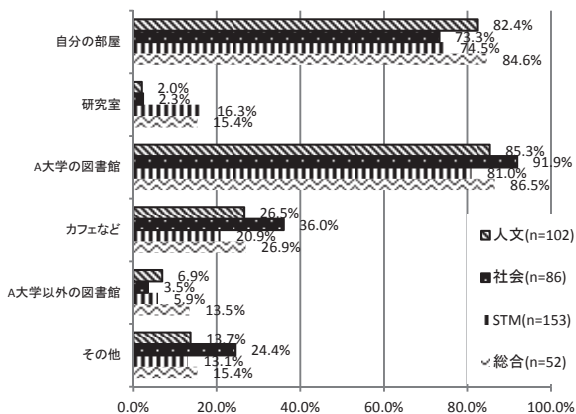


図1 学部生が学習によく利用する場所

を尋ねた結果、人文学の学生は1年生から図書館で授業の課題や調査に取り組むことが多いことが伺えた。社会科学・2年生3名は、自身を学習モードにする、また新聞やニュース雑誌を読むという目的で図書館へ足を運ぶ点で一致していた。STM・2年生と4年生、総合領域・4年生は、基本的に図書館を資料収集の場として捉えていた。このことは各学問領域に独特の授業スタイルや調査手法、設備環境などが、学生の図書館利用方法に影響を与えていると考えることができる。

一方、学習場所として図書館と並ぶ利用率を示した「自分の部屋」に関しては、「部屋は誘惑がある」、「ダレる」、「本は家でゆっくり読む」など領域を超えて共通した意見が多く、特に特徴的な差は見られなかった。

大学院生については、学習の場としても調査・研究の場としても図書館利用に学問領域別の特徴が見られた。学習場所としてA大学の図書館を最も利用するのは人文学(約87%)、次いで社会科学(73%)、STM(約62%)、総合領域(約38%)である(図3)。調査・研究する場(図4)としても人文学(約88%)と社会科学(約73%)が高い利用率を示す一方で、STM(約43%)と総合領域(約43%)の利用率は低い。このことは「図書

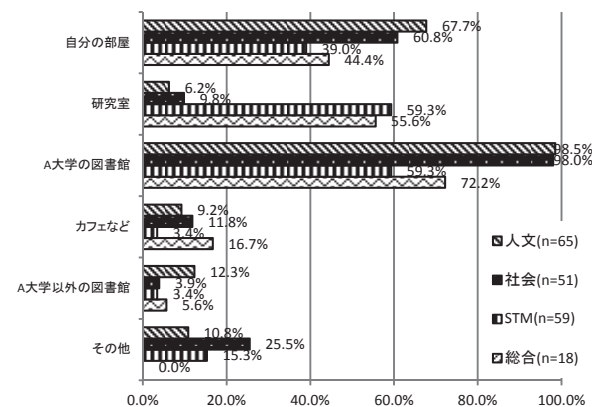


図2 学部生が調査・研究によく利用する場所

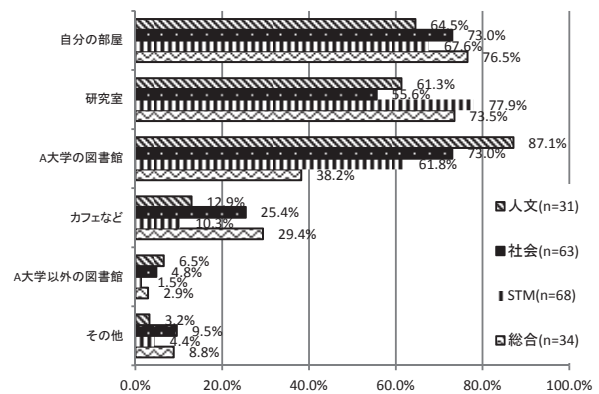


図3 大学院生が学習によく利用する場所

館に足を運ぶ主な目的」を聞いた設問においても、類似の傾向が確認できた。

インタビュー調査で場所の使い分けについて尋ねたところ、人文学と社会科学の大学院生から「研究室がないため図書館にいる時間が長くなる」、「図書館にしかない辞書を使う」、「研究個室を借りる」などの声が聞かれた。

一方、STMと総合領域には、図書館では資料収集や気分転換に行き、学習は自分の部屋、研究は研究室で行うという発言が目立った。大学院生の場所の使い分けは、属する学問領域の学習、調査・研究環境が大きく影響していると考えられる。

4.1.2 図書館滞在時間と学習、調査・研究時間との関係

質問紙で図書館平均滞在時間を調べたところ、学部生は社会科学で一部異なる動きが見られるものの、全ての学問領域においてほぼ同じ動きが示された(図5)。細かく見ると、3時間以上では人文学と社会科学がSTMと総合よりも若干高い割合を示している。

一方、図6に示した大学院生の図書館平均滞在時間は、学問領域別に異なる動きを示した。

「30分未満」の割合を見るとSTMと総合領域で高い割合を示し、この2領域のピークはどちらも「約1時間」

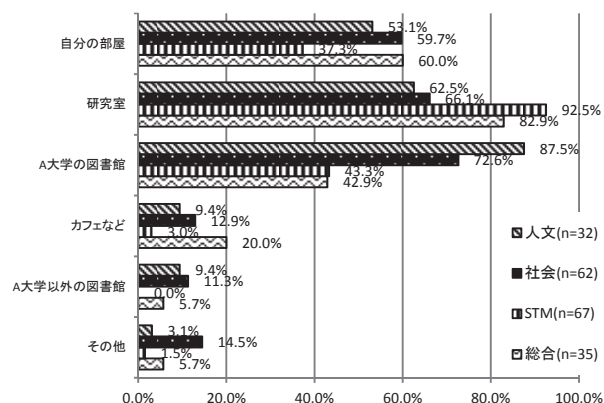


図4 大学院生が調査・研究によく利用する場所

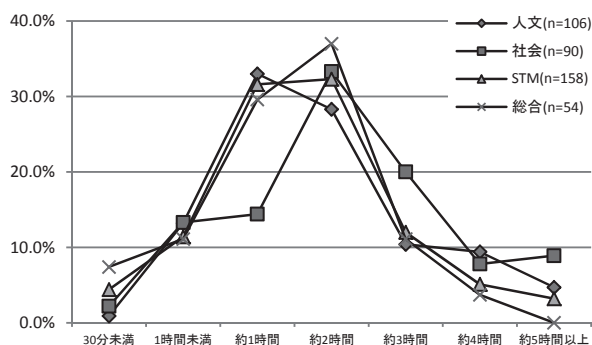


図5 学部生の図書館平均滞在時間

であることから、平均滞在時間が短いことが分かる。人文学と社会科学のピークは「約2時間」であり、特に人文学では「約2時間」から「約5時間以上」の選択肢は他領域よりも割合が高く、図書館滞在時間が長い。

質問紙では「授業時間以外に行う学習の合計時間は一日平均どれくらいですか」という設問を設け、(1) 1時間未満、(2) 約1時間、(3) 約2時間、(4) 約3時間、(5) 約4時間、(6) 約5時間以上の6つの選択肢の中から当てはまるものを一つだけ選択してもらった。この設問に対する回答者数は、学部生393名(人文 n=102, 社会 n=85, STM n=154, 総合 n=52)、大学院生197名(人文 n=31, 社会 n=64, STM n=68, 総合 n=34)である。この設問の結果から一日の平均学習時間を出し、図書館平均滞在時間をクロス集計し、学習時間と図書館滞在時間との関係を見る。平均学習時間を2時間以下と3時間以上に分けたのは、標本数が少なく、選択肢を(1), (2), (3)と(4), (5), (6)でまとめたためである。また、クロス集計は、図書館平均滞在時間ごとに行っている。例えば、図書館平均滞在時間が約2時間では75名の学部生が学習時間の設問に回答し、内、学習時間が2時間以下の学部生が56名(75%)、3時間以上の学部生が19名(25%)というように集計しているため、図7~10の折れ線グラフの縦軸の上限は100%となっている。

学部生全体では、図7に示した通り、学習時間が多

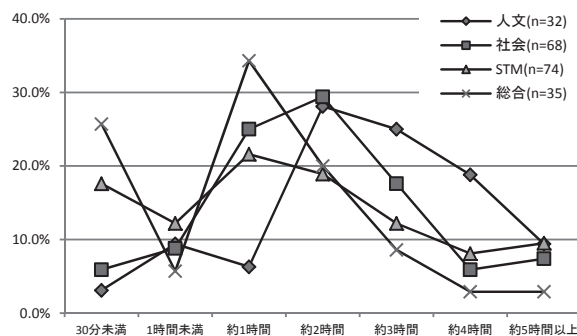


図6 大学院生の図書館平均滞在時間

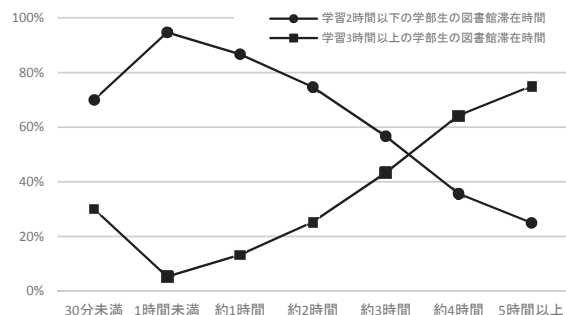


図7 学習時間と図書館平均滞在時間(学部生全体)

いほど図書館滞在時間が長い傾向が見られた。統計分析ソフト SPSS を用いカイ二乗検定を行ったところ、1 % 水準で有意であることが確認できた。標本数は少なくなるが、学問領域別に見ても 4 領域全てにおいてこの傾向が見られた。

一方、調査・研究時間と図書館平均滞在時間の関係を見ると、学習とは異なる傾向を示した(図8)。滞在時間「30分未満」以外では、調査・研究時間2時間以下の学部生の図書館滞在時間が、調査・研究時間3時間以上の学部生を上回る結果になった。学部生は図書館滞在時間に関わらず、調査・研究に時間を充てることが少ない可能性がある。「30分未満」を選択した学部生の学問領域を確認したところ、STM5名と総合領域2名であり、STMの1名を除く6名が調査・研究時間として「3時間以上」を選択していた。インタビュー調査でもSTMの学部生が「図書館内でじっくり何かするというよりも情報を集めるために使う」と発言していることから、資料探索や貸出目的で短時間利用する特徴が表れたと考えられる。

図9に示したように、大学院生の学習時間と図書館平均滞在時間の関係においても、学部生と同様、全体的には学習時間が多いほど図書館平均滞在時間が長くなる傾向が見られる(10%水準で有意)。学問領域別には統計的な有意差はなかったが、それでも学習時間が多いほど

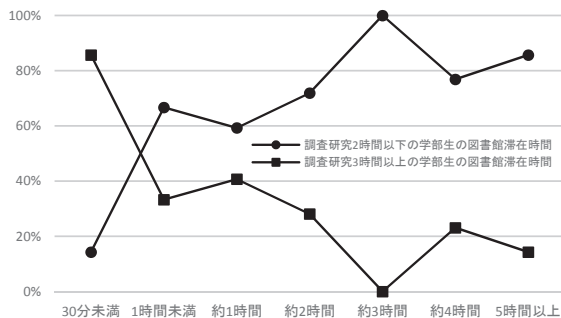


図8 調査・研究時間と図書館平均滞在時間（学部生全体）

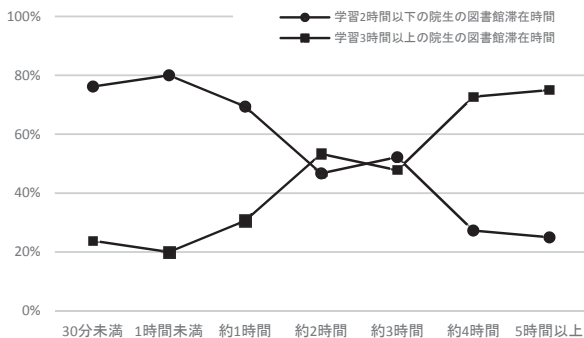


図9 学習時間と図書館平均滞在時間（院生全体）

ど図書館平均滞在時間が長くなる傾向は認められた。一方、調査・研究時間との関係では、大学院生は図書館に長く滞在するしないに関わらず、調査・研究に時間を多く充てていることが読み取れる(図10)。学問領域別でもこの傾向は見られた。

インタビュー調査においても、人文学の院生から「学内にいる間に資料収集を行い、それを自宅に持ち帰る」、総合の院生から「昼間研究室にいる時は研究、土日は自宅で」、社会科学の院生から「調査・研究は、自分の部屋だと20時以降が多い」などの発言が聞かれ、場所に関わらず調査・研究が行われていると言える。

4.1.3 図書館利用頻度と助言を求める相手

質問紙で図書館利用頻度を調査したところ、学部生では「週1～2回」と「週3～4回」の割合が高く、学問領域間で多少の差は見られるものの、ほとんど同じ動きを見せた(図11)。

一方大学院生では学問領域別に異なる傾向が見られた。人文学で、「ほぼ毎日」が約56%を占め、「月に1-2回以下」は0%である。社会科学は「週に3-4回」と「週に1-2回」でそれぞれ約30%の割合を占めている。STMでは「週に1-2回」が約45%を占め、総合領域は「月に1-2回」が約30%と、他領域よりも高い割合を示している(図12)。

Whitmire (2001)²⁷は「教員と学生（1～3年生までの学部生）との対話」を大学図書館利用に影響を与える

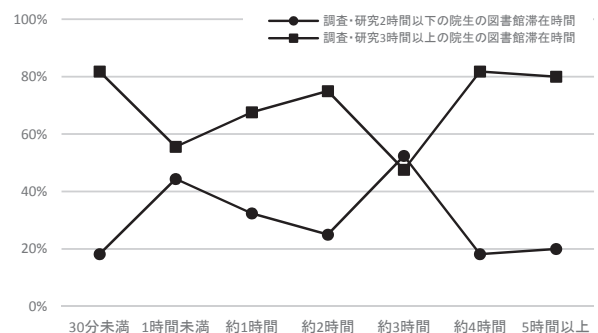


図10 調査・研究時間と図書館平均滞在時間（院生全体）

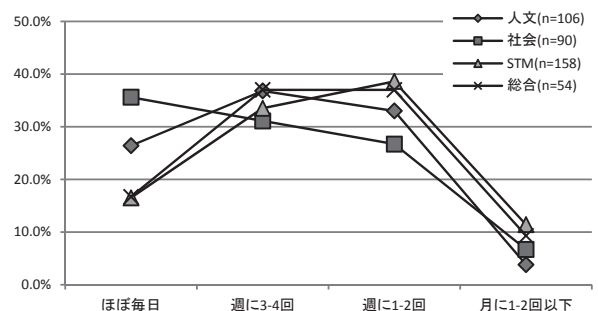


図11 学部生がA大学図書館へ行く頻度

変数の一つとして挙げている。そこで、上記の「図書館利用頻度」と「教員に助言を求める学部生」をクロス集計し、これを検証した(図13)。その結果、「教員」に助言を求める学部生245名の内約65%は週に3～4回以上の割合で図書館に足を運ぶということが明らかになった(1%水準で有意)。「先輩」では161名中約55%、「友人」では331名中約57%であり、これらと比較しても「教員に助言を求める学部生」は図書館利用頻度が高い傾向が見られる。インタビュー調査で助言を求める相手の優先順位や内容を尋ねたところ、8名中6名が「教員」を1～2番目に選び、教員に対して聞きづらいという印象は持っていない。「先生は聞いて当然の存在」、「授業の時に直接聞けることは直接聞き、課題や研究のことはメールする」、「専門的なことが聞ける」、「先生なら確実に答えられる」などの他、「[図書館で入手できる資料] 研究室の先生に聞いて、あるのも結構ある」という発言も聞かれた。

大学院生についても同様にクロス集計を行ったところ、「教員」に助言を求める171名中約49%が週に3～4回以上の割合で図書館に足を運び、「先輩」では128人中44%、「友人」では136人中53%と、全体的に低い割合になった(図14)。つまり大学院生の場合、助言を求める相手が図書館利用頻度に影響を与えることはあまりないと言える。

インタビュー調査では、大学院生が「友人」を「教員」や「先輩」よりも遠慮せず簡単なことでも気軽に尋ねら

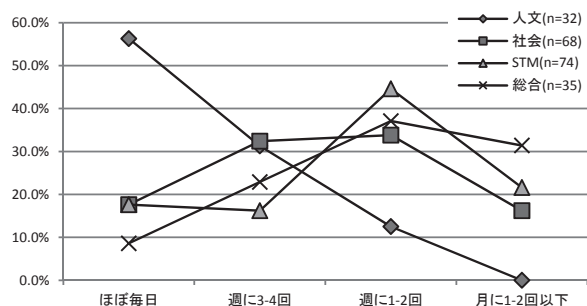


図12 大学院生がA大学図書館へ行く頻度

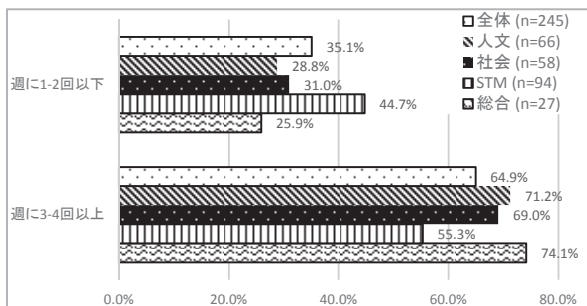


図13 教員に助言を求める学部生の図書館利用頻度

れる存在として捉えていることが伺えた。「先生とは研究テーマが異なり噛み合わない」、「分野が違う質問もある」、「先生に簡単なことを聞くと悪い印象を与えるかもしれない」という思いから、「教員」に質問する際にはその内容が適切かどうかを吟味してから聞く、という姿勢が伺えた。この項目に関しては、学部生、大学院生共に学問領域別の特徴は見られない。

4.1.4 レファレンスサービス利用と図書館不安

レファレンスサービス利用について、学生利用者の特徴を検証した。表2は、質問紙調査で得た学部生のレファレンスサービス認知度や利用傾向を学問領域別に示したものである。レファレンスの認知度と利用経験ともに、STM領域で最も低く、主な利用目的が人文・社会とSTM・総合で明確に分かれる点が特徴的である。

レファレンスの利用手段としてはレファレンスカウンターが学問領域に関わらずよく利用されている。しかしカウンターを利用しないと答えた一部の学部生(13名)は、「対面サービスが苦手だから」(5名)、「利用し

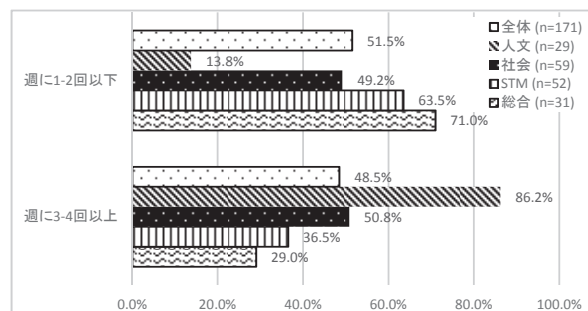


図14 教員に助言を求める大学院生の図書館利用頻度

表2 学部生のレファレンス利用傾向

人文学	レファレンス認知度約62%、利用経験約49%。主な利用目的は「特定の研究テーマに関する資料を求める(文献複写依頼も含む)」(50%)。レファレンスカウンターでの利用は97%、メールかウェブフォームでの利用は約9%。
社会科学	レファレンス認知度約62%、利用経験約51%。主な利用目的は「特定の研究テーマに関する資料を求める(文献複写依頼も含む)」(約52%)。レファレンスカウンターでの利用は約89%、メールかウェブフォームでの利用は約15%。
STM	レファレンス認知度約42%、利用経験約23%。主な利用目的は「探している本や雑誌の所在を聞く」(約87%)。レファレンスカウンターでの利用は約100%、メールかウェブフォームでの利用は約7%。
総合領域	レファレンス認知度約71%、利用経験約35%。主な利用目的は「探している本や雑誌の所在を聞く」(約54%)。レファレンスカウンターでの利用は約69%、メールかウェブフォームでの利用は約31%。

にくい雰囲気があるから」(4名)などの理由を選択し、またレファレンスサービスを知っていながら利用したことがない、と答えた学部生(29名)からも、「図書館では解決できそうにないから」(9名)、「利用しにくい雰囲気があるから」(5名)、「人に頼ることに抵抗があるから」(5名)などの回答を得た。さらにインタビュー調査においても、「図書館員は事務的な感じがするため自分の話を聞いてくれるのか心配になる」、「担当者が忙しそうで聞きづらい」、「あまり丁寧に教えてもらえずもう一度自分で調べた」などの意見が聞かれ、学部生はレファレンスカウンターに近づきづらい印象を持つ傾向にあることが伺えた。つまり、学部生は「図書館不安」(定義は2.1参照)を抱えやすいと考えられる。Mellon (1988)²⁶では「学校図書館より規模がかなり大きく、多くの場合学生がこれまで利用してきた公共図書館よりも大きい」大学図書館に学生が不安を感じるのは当然だとされる。

表3は、大学院生のレファレンスサービス認知度や利用傾向を学問領域別に示したものである。ここでもSTMが認知度、利用経験ともに低い割合を示している。学部生と同様に、レファレンスカウンターの利用率は全体的に高いが、利用しない理由は、「特に必要ないから」や「質問内容が専門的で図書館では解決できそうにないと思うから」が多く、学部生とは異なる傾向が見られた。インタビュー調査においても、大学院生には専門的な内容について図書館員に相談することを躊躇う発言が多く聞かれた。またカウンターの長所として「意思疎通しやすい」、「速い」、「気軽に楽」といった意見が聞

かれ、大学院生には図書館不安の要素がほとんど見られないと言える。

4.2 Syllabus study 結果

インタビュー調査で授業のコマ数の聞き取りを行った結果、大学院生が履修する授業のコマ数は少なく、全く履修していない場合もあるため、シラバス内容が図書館利用に与える影響は低いと推察される。そこで、大学院の syllabus study の優先順位は学部の次と位置づけ、学部の syllabus study を先に実施した。大学院生の syllabus study については追って実施の予定である。

入手したシラバスの内、現時点でデータ入力が終了しているのは、15学科のシラバスデータである。入力済みのシラバス(=科目)件数は2,135件で、その学問領域別の内訳は、表4に示す。

4.2.1 「成績評価方法・基準」項目の分析

シラバス中の「成績評価方法・基準」の項目に記載の内容を12項目に分類した。Bers (1996)⁵⁵の手法を参考に、シラバスに関する質問紙調査を仮定し、「はい」「いいえ」で回答するような形でデータ入力した。例えば、「出席」の項目であれば、「出席は成績評価基準に含まれるか?」という質問を想定し、シラバスの「成績評価方法・基準」の欄に「出席」の記載があれば「はい」、なければ「いいえ」と回答した。シラバスの「成績評価方法・基準」の欄が空欄である場合、つまりシラバス上に全く「成績評価方法・基準」が何も記載されていない場合には、「記載なし」と回答した。その上で各項目を学問領域別に分析したものが図15、履修年次別に分析したものが図16である(図中に示される割合は、「はい」「いいえ」「記載なし」の内、「はい」の割合である)。

「出席」、「試験」、「レポート、論文、報告書など」の3つは、どの学問領域においてもどの年次においても、高い割合を示す成績評価基準であることが分かる。「研究論文／レポート／調査課題」が最も図書館利用について言及されたカテゴリーであることを指摘した先行研究⁴²や「調査した授業の41%が必須の調査報告書、プロジェクト、レポート、スピーチで図書館を利用する」こ

表3 大学院生のレファレンス利用傾向

人文学	レファレンス認知度約74%、利用経験約91%。主な利用目的は「特定の研究テーマに関する資料を求める(文献複写依頼も含む)」(81%)。レファレンスカウンターでの利用は約91%、メールかウェブフォームでの利用は約43%。
社会科学	レファレンス認知度約69%、利用経験約87%。主な利用目的は「特定の研究テーマに関する資料を求める(文献複写依頼も含む)」(約63%)。レファレンスカウンターでの利用は約90%、メールかウェブフォームでの利用は59%。
STM	レファレンス認知度約41%、利用経験約57%。主な利用目的は「探している本や雑誌の所在を聞く」(約65%)。レファレンスカウンターでの利用は約88%、メールかウェブフォームでの利用は約6%。
総合領域	レファレンス認知度80%、利用経験75%。主な利用目的は「探している本や雑誌の所在を聞く」(約67%)。レファレンスカウンターでの利用は約91%、メールかウェブフォームでの利用は約38%。

表4 シラバス収集先の学問領域別内訳

学問領域	科目数
人文学	629
社会科学	201
STM分野	665
総合領域	640
合計	2135

とが報告された先行研究⁴²から、3つの内「レポート、論文、報告書など」が最も図書館利用との関連性が深いと考えられる。

次に、学問領域別と年次別に見られる特徴と、図書館利用の特徴を照らし合わせて分析する。

人文学

「出席」「試験」「レポート、論文、報告書など」の割合が他領域に比べて低い、その分人文学では成績評価対象となる項目が多様で、分散されている。例えば1年生には「予習、復習」、1～2年生には「小レポート、コメントシートなど」、2年生には「課題、宿題、提出物」、3～4年生には「フィールドワークなど」、4年生には「発表、報告など」や「討論、議論など」を評価基準とする傾向が見られた。このことが、図書館へ「授業準備」のために足を運ぶ人文学の傾向に影響を与えている可能性がある。また、「レポート、論文、報告書」「発表、報告」「小レポート、コメントシート」「討論、議論」など、自ら考え、調査し、まとめるという手順を踏まなければならない課題が多いことから、レファレンスサービスを利用して課題をこなす手法を早い段階から身につけている可能性が示唆された。

社会科学

主要3項目の中で最も成績評価基準として割合が高いのは「レポート、論文、報告書など」である。人文学

に次いで成績評価対象となる項目に広がりがあり、1～2年生には「小レポート、コメントシートなど」、4年生には「発表、報告など」や「討論、議論など」を評価基準とする傾向が見られた。「平常点」も重視される傾向にある。また、「出席」の割合は4領域の中で最も低く、「試験」の割合は人文学の次に低い。「予習、復習」、「課題、宿題、提出物」など、人文学には見られたシンプルな「授業準備」の割合は低く、調べてまとめなければならない課題が中心であることが特徴的である。社会科学の学部生には「調査・研究」目的で図書館に足を運び、レファレンスサービスを利用する傾向があるのは、このような授業課題の影響が考えられる。

STM

主要3項目の中で最も成績評価基準として割合が高いのは「試験」である。また、「小テスト、クイズなど」に関しても、他領域より高い割合を示し、成績評価の際に、知識や記憶を試す手段が採用される傾向が見られた。「平常点」「小レポート、コメントシートなど」「課題、宿題、提出物」「フィールドワークなど」「討論、議論など」の割合は全て4領域の中で最も低い。授業準備のために図書館で資料収集や調査をする必要性が低いことが示唆された。図書館での学習、調査・研究支援サービスを利用する必要性がなければ利用経験が生まれるは

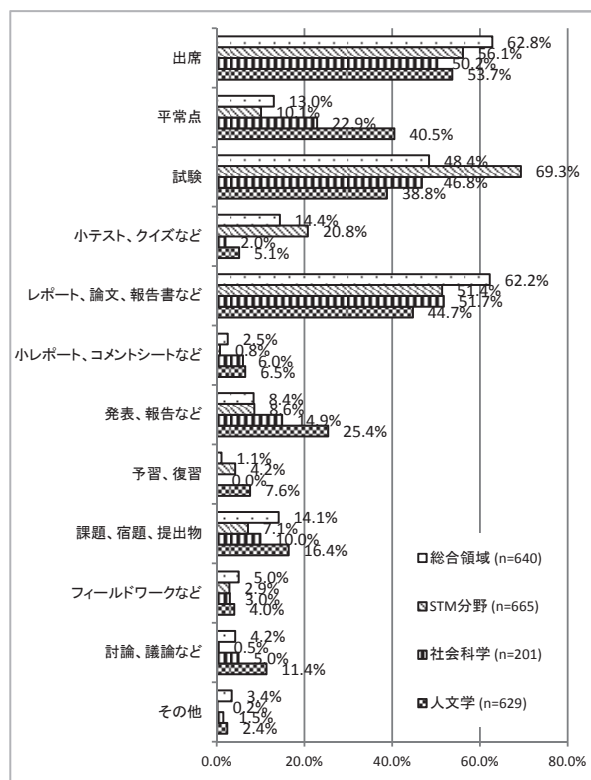


図15 成績評価方法・基準（学問領域別）

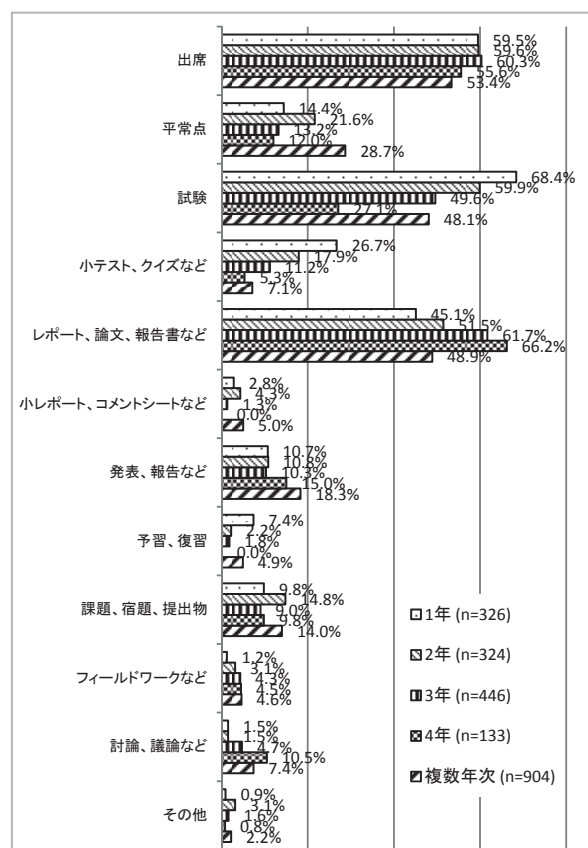


図16 成績評価方法・基準（履修年次別）

ずもなく、その意義に触れる機会はあまりないと考えられる。そのため図書館を「資料収集の場」もしくは試験勉強などの「自習場所」として認識する割合が高くなる可能性がある。

総合領域

主要3項目の中では、「出席」と「レポート、論文、報告書など」の割合が4領域の中で最も高い。「試験」は、STMに次いで高い割合を示す。「小テスト、クイズなど」もSTMに次ぐ割合であり、成績評価の際に知識や記憶を試す手段が採用される傾向が人文学や社会科学よりは見られるが、STMほど顕著ではない。「発表、報告など」と「予習、復習」の割合は4領域中、最も低い。また「平常点」「小レポート、コメントシートなど」「討論、議論など」は、STMに次いで低い。「課題、宿題、提出物」の割合は人文学に次いで高く、「フィールドワークなど」の割合は4領域の中で最も高い。4領域の中で、成績評価基準に最も統一感のない印象が残るが、最も学際的な領域こそその傾向とも言える。図書館利用にもその傾向は反映され、STMと同様「自習場所」としての利用が多い一方で、レファレンスなどのサービス認知度は高く、レファレンスサービスを利用した資料収集を行う傾向が見られる。

以上のように、シラバスの「成績評価方法・基準」を分析した結果、学問領域別の図書館利用の特徴と呼応する傾向が見られた。このことは、シラバスを注意深く分析することで学生利用者の図書館利用傾向やニーズを予測し、特定の利用者グループに応じたサービスを予め設計し、準備することか十分に可能であることを示唆している。A大学図書館における図書館サービスの現状を見ると、シラバスを分析した上で学問領域別に設計されたサービスはほとんど見当たらない。例えば、利用者教育として提供されている1年次の図書館オリエンテーションや図書館ツアーでは、基本的な図書館利用法の説明にとどまり、その後のフォローアップはされない。オーダーメイド講習会に申し込み、希望の内容をリクエストすれば、学問領域に特化した講習（例えば「農学文献の探し方」など）を受けることは可能である。しかし、これが日常的なサービスとして浸透しているとはいえない。存在を知らない学生も多い。本研究でも明らかになったように、図書館不安を抱く学生は少なくないため、学生が相談に来ることを待つという受け身のサービスでは、大学教育に貢献することは難しい。米国でsyllabus studyが、「主体的な図書館サービスのために今なお人気がある手法である」⁴⁷⁾のは、こういった問題を克服するためであり、文献レビューで扱った多くの先行

研究がこの手法の有効性を証明してきた。

本調査結果では、この有効性について可能性を示唆するにとどまり、明快な結果は得られなかった。これは今後の課題である。

4.3 まとめ

質問紙調査、インタビュー調査、syllabus study から以下6点が明らかになった。

1. 学部生の場合、学習場所としての図書館利用には学問領域による差はないが、調査・研究場所としては特徴が現われる。一方、大学院生では学習、調査・研究ともに、図書館利用に学問領域別の特徴が見られる。
2. 学部生も大学院生にも、学習時間が多いほど図書館平均滞在時間が長くなる傾向が見られる。
3. 教員に助言を求める学部生には、図書館利用頻度が高くなる傾向が見られるが、大学院生の場合、助言を求める相手が図書館利用頻度に影響を与える割合は低い。（この点で学問領域による特徴は見られない。）
4. レファレンスサービスの認知度や利用傾向に関しては、学部生、大学院生に関わらず、学問領域別に特徴が認められる。
5. 学問領域を問わず学部生は図書館不安を抱く傾向にあるが、大学院生にその傾向は見られない。
6. 学部授業の「成績評価方法・基準」には、学問領域別の特徴が見られる。その特徴は、学部生の図書館利用に影響を与える可能性がある。

本調査結果から、A大学図書館では身分や学問領域により、学生利用者が図書館に求める役割が一律ではないこと、履修する授業と学生の図書館利用との間には関係性があることが示唆された。つまり、A大学図書館は、各利用者グループから求められる役割を考慮したサービス展開を行うことにより、これまで以上に学生の学習や調査・研究に貢献し得る可能性が示されたと言える。

このように身分別、学問領域別に、利用者の特徴や共通点、授業の傾向などを把握することができれば、蔵書構築、利用者教育、レファレンスなどのサービスに求められるニーズを見越すことが可能となり、サービスの効果や効率を上げ、新しいサービスの開発にも繋がる。「親組織の学術的領域を分析しようとする努力（挑戦）は全ての大学図書館の健全な運営管理のための必要条件である」という Rambler (1982)³⁵⁾の言葉の真意はそこにあると考える。

本研究の今後の課題には、

1. 現在継続中のシラバス調査において、未入力データの入力その他、「授業形態」や「テキスト、参考資料」の項目の分析を急ぎ、より詳細に授業と図書館利用との関係を明らかにする
2. シラバスでは把握しえない点について教員ヘインタビュー調査を行う

などが挙げられる。これらの分析を通して、日本における「対応力のある図書館 (responsive library)」³⁵ (=カリキュラムに組み込まれた図書館) についても検討していきたい。

Bibliography

- ¹ 科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会. 大学図書館の整備について (審議のまとめ): 変革する大学にあって求められる大学図書館像. 文部科学省, 2010. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm, (参照 2015-02-17).
- ² 科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会. 学術情報基盤の今後の在り方について (報告). 文部科学省, 2006. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1213896.htm, (参照 2015-02-17).
- ³ 学士課程教育の構築に向けて (審議のまとめ). 中央教育審議会大学分科会制度・教育部会, 2008, 52 p. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410/001.pdf, (参照 2015-02-17).
- ⁴ 文部省大学学術局情報図書館課. 大学図書館施設計画要項: 答申. 文部省大学学術局情報図書館課, 1966, 90p.
- ⁵ 小島英治. 学習図書館理念の変遷と「学習図書館構想」のあり方. 中京大学図書館学紀要. 1992, 13, p.17-31.
- ⁶ 近藤文良. 「学び」を支援する学習図書館をめざして. 滋賀大学附属図書館情報: 図書館だより. 2003, 28, p.1-3.
- ⁷ 文部科学省研究振興局情報課. 大学図書館における先進的な取り組みの実践例: 大学の学習・教育・研究活動の質的充実と向上のために. 文部科学省, 2011, 40p. http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/attach/1314099.htm, (参照 2015-02-17).
- ⁸ 永田治樹. 大学図書館における新しい「場」: インフォメーション・コモンズとラーニング・コモンズ. 名古屋大学附属図書館研究年報. 7, 2008, p.3-14.
- ⁹ 竹内比呂也. “大学図書館職員の新たな役割”. 平成22年度大学図書館職員長期研修: 講義資料. 国立大学法人筑波大学, 2010, p.49-57. <http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/choken/2010/all.pdf>, (参照 2015-02-17).
- ¹⁰ フィッシャー, アレク. クリティカル・シンキング入門. 岩崎豪人ほか訳. ナカニシヤ出版, 2005, p.5.
- ¹¹ Whitmire, Ethelene. Development of critical thinking skills: An analysis of academic library experiences and other measures. College & Research Libraries. 1998, 59 (3), p. 266-273.
- ¹² Pascarella, Ernest T.; Terenzini, Patrick T. How college affects students : findings and insights from twenty years of research. Jossey-Bass Publishers, 1991, 894p.
- ¹³ Ory, John C.; Braskamp, Larry A. Involvement and growth of students in three academic programs. Research in Higher Education. 1988, 28 (2), p. 116-129.
- ¹⁴ Terenzini, Patrick T.; Springer, Leonard; Yaeger, Patricia M.; Pascarella, Ernest T.; Nora, Amaury. First-generation college students: Characteristics, experiences, and cognitive development. Research in Higher Education. 1996, 37 (1), p. 1-22.
- ¹⁵ Terenzini, Patrick T.; Springer, Leonard; Pascarella, Ernest T.; Nora, Amaury. Influences affecting the development of students' critical thinking skills. Research in Higher Education. 1995, 36 (1), p. 23-39.
- ¹⁶ Ormondroyd, Joan. "The role of the library in promoting critical thinking in the classroom and beyond". Russian-American Seminar on Critical Thinking and the Library: Occasional Papers. 1995, 200/201, p. 119-125.
- ¹⁷ Bodi, Sonia. Collaborating with faculty in teaching critical thinking: the role of librarians. Research Strategies. 1992, 10 (2), p. 69-76.
- ¹⁸ Engeldinger, Eugene A. Bibliographic instruction and critical thinking: the contribution of the annotated bibliography. RQ. 1988, 28 (2), p. 195-202.
- ¹⁹ 竹内比呂也. 高等教育改革の機軸としての「アカデミック・リンク」序論. 丸善ライブラリーニュース. 2011, 15, p.8-9. https://www.maruzen.co.jp/lib/lib_news/pdf/library_news166_08_09.pdf, (参照 2015-02-17).
- ²⁰ 小松泰信. キャンパスポータルによる図書館サービ

- スのパーソナライゼーション. 大学図書館研究. 2002, 66, p.12-21.
- ²¹ 両角亜希子. 大学生の学習行動の大学間比較: 授業の効果に着目して. 東京大学大学院教育学研究科紀要. 2010, 49, p.191-206.
- ²² 青木久美子. 学習スタイルの概念と理論: 欧米の研究から学ぶ. メディア教育研究. 2005, 2 (1), p.197-212.
- ²³ 中央教育審議会大学分科会大学教育部会. 予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ (審議まとめ). 文部科学省, 2012. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1319183.htm, (参照 2015-03-27).
- ²⁴ Davis, Richard A.; Bailey, Catherine A. Bibliography of use studies. Office of Science Information Service National Science Foundation, 1964, 98p. (online), available from HathiTrust, (参照 2015-03-11) .
- ²⁵ MacAdam, Barbara. Sustaining the culture of the book: The role of enrichment reading and critical thinking in the undergraduate curriculum. Library Trends. 1995, 44 (2), p. 237-263.
- ²⁶ Mellon, Constance A. Library anxiety: a grounded theory and its development. College and Research Libraries. 1986, 47 (2), p. 160-165.
- ²⁷ Whitmire, Ethelene. The relationship between undergraduates' background characteristics and college experiences and their academic library use. College & Research Libraries. 2001, 62 (6), p. 528-540.
- ²⁸ Whitmire, Ethelene. Disciplinary differences and undergraduates' information-seeking behavior. Journal of the American Society for Information Science and Technology. 2002, 53 (8), p. 631-638.
- ²⁹ Biglan, Anthony. The characteristics of subject matter in different academic areas. Journal of Applied Psychology. 1973, 57 (3), p. 195-203.
- ³⁰ Biglan, Anthony. Relationships between subject matter characteristics and the structure and output of university departments. Journal of Applied Psychology, 1973, 57 (3), p. 204-213.
- ³¹ 片瀬一男. ハビトゥスとしての読書の力: 東北学院大生の図書館利用と学業成績. 東北学院大学教育研究所報告集. 2006, 6, p.23-54.
- ³² 戸田あきら. 大学図書館におけるアウトカムに関する研究: 学生の図書館利用と学習成果. 筑波大学, 2008, 博士論文.
- ³³ McGrath, William E.; Durand, Norma. Classifying courses in the university catalog. College and Research Libraries. 1969, 30 (6), p. 533-539.
- ³⁴ Golden, Barbara. A method for quantitatively evaluating a university library collection. Library Resources and Technical Services. 1974, 18 (3), p. 268-274.
- ³⁵ Rambler, Linda K. Syllabus study: Key to a responsive academic library. Journal of Academic Librarianship. 1982, 8 (3), p. 155-159.
- ³⁶ 江原武一. アメリカの学部教育の現状. 立命館高等教育研究. 2006, 6, p.59-70.
- ³⁷ Sayles, Jeremy W. Course information analysis: Foundation for creative library support. Journal of Academic Librarianship. 1985, 10 (6), p. 343-345.
- ³⁸ Whaley, John. An approach to collection analysis. Library Resources & Technical Services. 1981, 25 (3), p. 330-338.
- ³⁹ Anderson, Renee Nesbitt. Using the syllabus in collection development. Technicalities. 1988, 8 (1), p. 14-15.
- ⁴⁰ Lauer, Jonathan D.; Merz, Lawrie H.; Craig, Susan L. What syllabi reveal about library use: A comparative look at two private academic institutions. Research Strategies. 1989, 7 (4), p. 167-174.
- ⁴¹ McDonald, Joseph; Micikas, Lynda Basney. "Collection evaluation and development by syllabus analysis". Acquisitions '90: Conference on Acquisitions, Budgets, and Collection. David C. Genaway, ed., 1990, p. 289-316.
- ⁴² Bean, Rick; Klekowski, Lynn M. "Course syllabi: Extracting their hidden potential". The Sixth Off-Campus Library Services Conference Proceedings. Jacob, Carol J., eds. Kansas City, Missouri, 1993-10-6/8, Central Michigan University, 1993, p. 1-9.
- ⁴³ Williams, Lisa M.; Cody, Sue Ann; Parnell, Jerry. Prospecting for new collaborations: mining syllabi for library service opportunities. The Journal of Academic Librarianship. 2004, 3 (4), p. 270-275.
- ⁴⁴ Shirkey, Cindy. Taking the guesswork out of collection development: Using syllabi for a user-centered collection development method. Collection Management. 2011, 36 (3), p. 154-164.
- ⁴⁵ Smith, Cheri; Doversberger, Linda; Jones, Sherri; Ladwig, Parker; Parker, Jennifer; Pietraszewski, Barbara. Using course syllabi to uncover opportunities

- for curriculum-integrated instruction. *Reference & User Services Quarterly*. 2012, 51 (3), p. 263-271.
- ⁴⁶ Dewald, Nancy H. Anticipating library use by business students: the uses of a syllabus study. *Research Strategies*. 2003, 19 (1), p. 33-45.
- ⁴⁷ Finnell, Joshua; Fontane, Walt. Reference question data mining: A systematic approach to library outreach. *Reference & User Services Quarterly*. 2010, 49 (3), p. 278-286.
- ⁴⁸ 風間茂彦. <特集>メディアセンターは今－慶應義塾創立150年を迎えて－：学習図書館の軌跡－74年の歩み, そしてこれから. *Medianet*. 2008, 15, p.12-15.
- ⁴⁹ 長澤多代. 大学授業改革に求められる大学図書館の役割：大学審議会答申における授業と図書館を中心に. *日本図書館情報学会誌*. 2002, 48 (3), p.105-120.
- ⁵⁰ 長澤多代. アーラム・カレッジの図書館が実施する学習・教育支援に関するケース・スタディ. *Library and Information Science*. 2007, 57, p.33-50.
- ⁵¹ 新しい大学像を求めて：進む高等教育の改革. 大蔵省印刷局, 1996, 523p., (我が国の文教施策／文部省編, 平成7年度).
- ⁵² 大学セミナー・ハウス編. 大学力を創る：FD ハンドブック. 東信堂, 1999, 240p.
- ⁵³ 夏目達也ほか. 大学教員準備講座. 玉川大学出版部, 2010, 221p., (高等教育シリーズ, 149).
- ⁵⁴ Altman, Howard B.; Cashin, William E. Writing a syllabus. *Idea Paper*. 1992, 27, p. 3-5.
- ⁵⁵ Bers, Trudy; Davis, Diane; Taylor, William. Syllabus analysis: what are we teaching and telling our students?. *Assessment Update*. 1996, 8 (6), p. 1-14.
- ⁵⁶ Parkes, Jay; Harris, Mary B. The purposes of a syllabus. *College Teaching*. 2002, 50 (2), p. 55-61.
- ⁵⁷ Doolittle, Peter E.; Lusk, Danielle L. The Effects of institutional classification and gender on faculty inclusion of syllabus components. *Journal of the Scholarship of Teaching and Learning*. 2007, 7 (2), p. 62-78.
- ⁵⁸ “系・分野・分科・細目表”. 科学研究費助成事業2011 (平成23年)：新たな知の創造：世界をリードする知的資産の形成と継承のために. 文部科学省. 2011, p.32-33. http://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/24_pamph/data/pamph2011_kaitei.pdf, (参照 2015-02-21).

(平成27年 3 月31日受付)

(平成27年 7 月21日採録)